

看護職部門



## うれしかったで賞

【熊本県】土橋 桂子 つちはし けいこ  
80歳

看護の職場を離れて久しくなるが、私には忘れられない思い出がある。

昭和35年、大学病院付属の看護学校を卒業し同病院の第一内科に勤務することになった。40人の仲間もそれぞれの目的を持って東京、大阪、福岡などへ散って行った。私も「患者さんに寄り添える優しいナースになること」というささやかな目標をもって新米ナースとして日々頑張った。学生の時の実習とはまるで異なり、そこには責任というものがありきびしい毎日であった。第一内科は腎疾患と糖尿病の患者が主で比較的若い明るい病棟であった。ある時若くして糖尿病のため失明した患者さんから「あなた

は優しい看護師さんね、目が見えなくても分かるよ」と言ってもらった。とてもうれしくて私を認めてくれる人がいるのだと心に熱いものを感じた。

勤務は日勤、準夜勤、深夜勤がありそれぞれ大変であったが、特に苦手なのは深夜勤の蓄尿測定であった。まだまだ、技術の未熟さを痛感し技術の向上に務めると同時に「コミュニケーションにも心を配った。少しずつ仕事にも慣れ3カ月が過ぎたある土曜日の午後のこと、巡回のため病室に入った。その時大きな拍手とともに「うれしかったで賞」と手作りの横断幕が掲げられ大きな花束とバナナが手渡された。きよとんとしている私に、患者

一同の人気投票であなたが1位に選ばれたのだと説明があった。とてもうれしくとても感動した。バナナは、今でこそ安価で簡単に手に入るが、当時は病気でもしなければ食べられないほど貴重なものであった。

この賞を受けたことでどれだけ私の心の支えと励みになったことか。その後、養護教諭、看護教員など、仕事の場を変えたが私の根底にあるものは、いつもあの時の「うれしかったで賞」が生きており、自分の中では看護観も確立し充実した人生を歩むことができたことを誇りに思っている。